

千年守り続けた皇姫の
クローンになっちゃっ
た

先名咲亜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「魔笛」という力を持つ謎の存在「幽幻種」という脅威が存在する世界。人々が生きることができる地は、巫女の祈りによってなる「氷結鏡界」に守られる「浮遊大陸オービエ・クレア」のみであった。

天結宮（ソフィア）に所属する「氷結鏡界」を維持する巫女のさらに上にいる人物のクローンに憑依してしまった主人公。主人公の元になったオリジナルは沁力と呼ばれる人が生まれつき持っている力を誰よりも多く持っており、その力は魔笛と反発し、浄化することができる。また、この力によって『浮遊大陸』は浮かんでいることができ、用途によって、結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系があるのだが、クローンであ

る主人公は結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の全ての適正がなかった。

目次

7 話	始まりのとき2	39
6 話	始まりのとき	31
5 話	巫女様とご対面	26
4 話	名前	22
3 話	出会い	10
2 話	もうひとつの現実	4
	prologue	1

prologue

薄暗く、床には配線のコードが複雑に張り巡らされた部屋の中に白衣と来た男性と、その男性が見つめる先にある薄緑の液体が入ったカプセルの中には水鏡色の髪の少女が眠っていた。

白衣を着た男は目の前にあるディスプレイに映し出された結果を見ると表情を一変させた。

「くそっ!! なぜだ、なぜ結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系全ての適性が0なんだ!! 沁力はオリジナルと同等だというのに!!」

男は隣に置かれている機材を蹴り、その後すぐに部屋をでどこかへ行ってしまった。

カプセルの中で眠っている少女を置いて。

白衣を着た男が部屋を出て言ってからしばらく時間が経った頃、未だにこの部屋の機材は生きており、少女の命を繋ぎとめていた。

そして突如カプセルの内部に溜まった薄緑の液体が排水されはじめる。排水は数分で完了し、それと同時にカプセルが開き、その中にいた少女は床に投げ出される。

「……………うっ」

床に投げ出された衝撃で少女から声が漏れる。

「……………うう」

少女は目を覚まし、起き上がる。少女の体は薄緑色の液体で濡れており、水鏡色の髪が何もまとっていない幼い裸体に張り付く。

あれ……………ここどこだろうか？ 確か僕はいつもどおりに高校へ行くこうとして後ろから足音が聞こえて振り返ったら、そこには太った男が立っついていて、そのまま飛びかかられて元々小柄だった僕には抵抗できるはずもなく潰された……………は……………ず……………っ!!

少女は自分の体に目を向け驚く。

それは潰れたはずの体が無傷だったこと、そして体が少女のものになっていることに気がついたから。

「……………えっ？」

確かに元々小柄で顔も女の子っぽかった、それは認める。けれど性別は男だった。なのに今の僕の体は男ではなく女の体だった。

それに僕は日本人で両親も、祖父も祖母も全員日本人で僕の髪は日本人ではほとんど

がそうであろう黒色で短く、なるべく男に見えるような髪型にしていた。それなのに自分の体を見たときに見えた、今の僕の髪の色は銀というか水色というか、その間のなんて言えばいいのかわからないけれどそんな色をしていて、ふくらはぎあたりまで伸びている。

少女は気がついてしまった。今の体は前の自分の体ではないということに。

そして少女はこう言う場面を知っている。

そう、ネットなどである二次創作でアニメ、ゲーム、漫画等の原作の世界の人に憑依という物語の始まり方。

信じたくはなかった。しかしそれ以外には考えられない。

そしてその後はこうなったとき、ネットで見た主人公ほどの原作か気づき、その原作に関わっていくことになる。とは言ってもそれは物語の話であり、今の自分は現実のことだ。比べるのがおかしい、だが、今の現状は非現実的であり、現実ではない物語が一番近いのも事実。

とりあえず、情報を得ないと……。

情報を得ることができればもしかしたら原作のタイトルがわかるかもしれない。

もし分かればこれからのことも考えやすくなるだろう。そう願って少女は裸のまま部屋に置かれた機械をいじり始めた。

2話 もうひとつの現実

少女は一人、静寂が支配する部屋の中で外に出るための準備をしていた。

「うーん……、なんか変な感じがする」

わかったことについて整理してみようと思う。

まず、この世界が何かがわかった。つまり原作が何かわかった。この世界は氷結鏡界のエデンの世界だった。

僕が目覚めた部屋に置かれてた前世？より少し近未来っぽい機械をいじっていたら、ここがクローンを造る違法研究所であり、この世界で一番の沁力を持ち、千年に渡りこの浮遊大陸オービエ・クレアを守ってきた皇姫サラのクローンを造っていて、僕がそのクローンであること。

そして、何故かは分からないが天結宮ソファイアの機密情報から一般にも公開されているあらゆる情報があり、その中で約三年前に穢歌の庭に落ちてその一年後に浮遊大陸オービエ・クレアに戻ってきた天結宮を追放されたシエルティス・マグナ・イール……この世界の主人公のことも消されずに残っていた。シエルティスが戻ってきたのが約二年前ということは、原作が始まる年であり、すでに始まっているか、もうすぐ始まるかのどっちかだろう。

僕が知っているのは原作の一卷と二巻程度。しかも二次創作でしか見たことはない。氷結境界のエデンを原作として投稿されている二次創作は少なく、また話数も少なかった。

だから原作では確か九巻くらいまで出てたけれど、知っているのは二巻程度まで。

こんなことになるなら原作をすべて読破していればと後悔するけれど、二巻まであるだけマシかと前向きに考えることにした。

そしてその後も少し情報を収集したあと、とりあえずここから出るために服と万がーのための武器を探した。

武器は日本刀………?? 西洋の剣みたいにも両刃ではなく、刀身も広くはなく日本刀と同じくらい、長さは一メートル程で、唾は日本刀とは違って西洋っぽい。

しかも刃はこの世界オリジナルの蒼く煌く氷の刀身、氷結境界の蒼氷を材質に用いたものだった。

一応僕は剣を扱ったことはあるから自衛程度なら問題はないだろう。

服は一応あるにはあったのだが、下着だけは見つからなかった。

上は黒いパーカーで下は黒いホットパンツを着ている。

下はスカートとかほかにもいっぱい種類はあったんだけど、パンツないのにスカートとか無理です。というかパンツ履いてたとしてもスカート自体無理です。

ホットパンツの下は何も履いていないから変な感じがする。
でも何も着ないよりは断然ましだから！

「よし、まずは居住区にいこう！」

全身黒を纏い、背中には研究所にあつたお金5万Bと水と携帯食料ベルを入れたりユツクサツクを背負っており、右手には刀身の構築を解除して柄だけになった剣を握っている。

研究所から出て初めて見た異世界の外の景色。

人の手が入ってきていない自然の世界。それだけなら前の世界でも探せばあると思うけれど、目の前には明らかからに大きすぎる大樹とその上を飛ぶ2M以上はあるだろう生き物が空を飛んでたりしており、ここは異世界なんだなあと再度深く実感させられる。

僕は前の世界とは違うものに興味を示しながら森のなかを歩き始めた。

「はあ……はあ……はあ……」

森の中を歩いて3時間が経ったころ、僕は2メートル超えの狼5匹に追いかけられて

いた。

一時間前、運悪く狼の集団と出くわしてしまった。気がつかれる前に去ることができなければ今みたいにはなっていなかったと思う。

しかし、その時僕はその大きさに驚いてしまい、本当に聞こえるか程度の小さなものだったけれど声を出してしまった。

狼がどのくらい耳がいいのかは知らないけれど、さすがにあれは聞こえてないでしょ!!と言いたくなるほど狼の耳は性能抜群だった。

それ以降現在に渡って一時間以上も狼に追いかけられています。

本当ならば既に捕まってもおかしくないほどの速さで狼は追ってきているのだが、なぜか今の僕の体は思ったよりも速く走れて、前世なら全国大会とか余裕で優勝できそうなほどだ。

けれど、流石に体力の方はきついみたいで、もう体が重くて仕方がない。

「——っ！」

足が木の根に引っかかり体勢が崩れる。咄嗟に立て直そうとするものの、体と言う事を聞かずそのまま地面にダイブすることになった。

そのまま走って勢いでゴロゴロといくらか転がってようやく止まる。

痛たたた……、と痛む箇所を手で押さえながら立ち上がり再び逃げるために走り出そう

とするものの、結局走り出すことはできなかった。

なぜなら僕を追ってきていた狼が、見るだけ恐怖を感じさせるような濃紫色の霧を全身に纏った生物とは別の何か。

姿は僕を追ってきていた狼とほぼ同じ、違うところは全身に霧を纏っているため、体が見え隠れし、その見え隠れしている頭部には鮮血色に輝く二つの光が見えた。

そうそれは、この世界の敵、幽幻種……体内に魔笛を保有し、穢歌の庭に住むモノ。霧のような体の中にある核晶を破壊することで幽幻種を倒すことができるが、性格は非常に凶暴。

そして幽幻種が保有する魔笛がとても厄介なもので、相手の精神操作や腐敗、猛毒などとても危険だ。

幽幻種の魔笛は人だけでなく土や木、水すべてを侵食し紫色の煙を上げて腐敗させる。そしてそれは徐々に広がっていく。

■ ■ ■ …… ■ ■ ■ , ■ ■ ■ , : : : …… ■ ■ ■
 O e / D i a || U x e p h c l e y , D i s h e l a
 t e o p h e s k a o n

森に呪歌を思わせる奇妙な音色が響き渡った。

幽幻種の纏う霧よりも濃い色の光を放ち、幽幻種から霧が溢れ出てくる。

それは幽幻種の近くにいた、味方を殺され警戒していた残った狼たちを巻き込んで幽幻種を中心とした範囲内のすべてを侵食し、腐敗させた。

巻き込まれた狼たちは侵食されたところから紫色に変色され、そのすぐあとを追うようにドロドロと溶けていく。

その嫌な不快な、匂いがここまで風に乗って届いてきて吐きそうになるも我慢してなんとか耐えきる。

幽幻種は今の出来事が何事もなかったかのように、ゆつくりとこちらに実態があるのかわからない霧に包まれた足で、向かってくる。

やばい、逃げなくちゃ、でないと狼と同じ最後を味わうことになってしまう。

幽幻種のこととは前世で物語として知っていたけれど、ここは現実で文字では表せない何かがあると知った。

そしてこの世界は本の物語の世界ではなく、原作など無い現実だと深く教えられた。

3話 出会い

自然区南側、第四公園。僕たちはそこに来ていた。来るときにエリエが制限速度を無視して警備機に追いかけられたけど、3時間かかって逃げ切った。

今日ここにきた理由はみんなでバーベキューをするというもの。

なんにもない普通の日常。

今日一緒に来ているエリエやユトにはこれが普通なんだと思う。けれど、僕は……。

2年前僕は天結宮^{ソファイア}を追放された。

「シエルテイス、食べるよー」

「シエル兄、はやくー」

声が出た方へ視線を向けると、エリエとユトの二人は既にコンロもセットされ、その上には鉄のプレート、そして隣には僕が用意した最高級の肉と野菜が置かれていた。

僕は急いで二人のもとに行き、一言謝る。するとエリエが僕をバーベキュー版の鍋奉行に任命した。

その後、順調に進み、

「お肉焼けたー?」

「あ、ユト。それまだ生焼けだからダメだつて。こっちの野菜あげるから」

その光景にどこか懐かしさを感じ、既視感にも思える光景に何とも言えない気持ち
が湧き出てくる。

確か、前にもエリエ達と出合いよりもっと前に同じようなことがあつた気がする。

僕と幼馴染であり、天結宮ソフィアの五人しかいない巫女の一人ユミイ、そして千年獅のレオン。

レオンはユミイとは別の巫女の千年獅で、ユミイの千年獅はユミイが巫女になつてから今までずつといない。

ユミイ、それは僕を——

——ぞくつ。

「っ!!」

僕は手に持っていた肉や野菜の乗ったプレートを投げ出して、背後の森へ振り返る。

「え、ちよつと! 最高級のお肉と野菜なんで投げ捨てちゃったの!」

「静かに」

視線は森に向けたまま、エリエを制す。

この懐かしいような感じのする寒気。

まさか……。

僕はエリエから電気槍を借りて一步、また一步と目の前の樹海へ歩を進める。

樹海に入つてすぐ、巨木があるそこで足を止めた。

それを追つてくるように後ろから聞こえてくる二人の足音。

「こーらーシエルティス、勝手に行かないでつてばー！」

がさがさ、と周りの枝をかき分け、エリエがユトの手をつないで歩いてくる。

「エリエ、待つてあんまりこっちに近づかないほうがいい」

今にも近づいてきそうな彼女らに、手を垂直に上げて制止を促した。

「……………」

「シエルティスつてばー！さっきから黙っちゃつてどうしつ——！！」

僕の制止を無視してすぐ真後ろまで来たエリエは、目の前の巨木を見て声にならない

悲鳴を上げた。

「……………な、なによ……………これ……………」

そこには、樹齢百年を超えるであろう大木が、立ったまま幹を紫色に腐らせて枯れていた。

細い枝の先端、葉の一枚。その全てにいたるまで、毒々しい紫色に腐っている。

それだけではない、その木の周囲にある落ち葉、枯れ木、土壌までもがブスブスと濃

紫色の煙を上げて腐っていた。

それが今なお、腐敗が侵食し、樹海に広がりとつある。

「紫の煙……まさか……『アレ』の仕業……？」

蒼白になつた表情でエリエが立ちつくす。

「……………」

しやがみこんで、紫色に腐りつつある土に触れようとして――

突如名前を呼ばれるとともにエリエにぎゅつと肩を掴まれた。

「シエルティス！何を考えてるの！知ってるでしょ、それに触ったらシエルティスまで感染する！」

「……………そうだね、ごめん」

指先を地面から離し、かわりにじつと腐敗を凝視する。まだ地面の傷が新しい。アレ……幽幻種がここに現れて一時間……いやもつと新しい。下手すれば数分前……。

「ユト、エリエ。ここから離れたほうがいいのかもれない。こういうことへの対応は僕たちじゃなくて専門家に任せたほうがいいから」

立ち上がり、背後の二人へ振り返った。

「専門家って、天結宮^{ソフィア}の連中？」

「うん、アレの痕跡を一般人が見つけたら天結宮^{ソフィア}に通報、自分たちはその場を離れる――

エリエも知ってるでしょ？」

オージェ・クレア
浮遊大陸にこらすモノなら誰もが知っている規則だ。守らなかつた場合の罰則規定は存在しない。ただし、守らなかつた場、誰も命の保証はしてくれない。

「とういわけで、急いだ、急いだ！」

怯える二人の背中をを押しながら、急いでこの場を立ち去る。

……これでいいんだしよね？

今の僕は天結宮ソファイアの錬護士でなければ正護士、護士候補生ですらない。アレに関わる必要はないんだ。

もう少して森を抜けるといふとき、突然、がさがさと何者かの存在をしめす音が響いた。

僕はすぐに怖がっているとすぐに分かりそうなほど顔が蒼白になった二人、エリエとユトの二人の前に出て、電気槍を構え、いつでも対処できるようにする。

「もしアレが現れて、襲つてきたら、僕を置いてヴィークルのところに逃げて！」

「え、シエルテイ——」

——がさがさ

その音とともに飛び出してくるもの、それは人だった。銀髪、白髪、いや少し水色が混

じっているから水鏡色。その色の髪を膝裏あたりまでのばした少女。

黒いTシャツと黒のホットパンツは所々木々で破けたようなあとと、鋭い何かで綺麗に裂かれたあとがあり、その服を着る少女の体にも何かで裂かれたような傷跡があり、今なお、赤い血が止まることなく流れ出ていた。

「え、えっ?! しえ、シエルテイス！」

「……………紗砂?!」

エリエの声にユトの声は飲み込まれ、何を言っているのかは聞こえなかったけれど、なにかエリエとは違うことを言っていた気がする。

飛び出してきた少女は気絶しており、何が起きたかは聞けない。

それよりも、今はこの子の手当てをしないと、それにもしかしたらこの少女の傷をつくった生き物がいるかもしれない。

「エリエ、この子をお願い！」

もし、この子にけがを負わせた生き物が現れたら、すぐに動けるようにしておきたい。それにもしかしたらアレもくるかもしれない。

——がさがさ

樹海に、呪いの歌が響き渡った。

幽幻種の纏う紫色の煙が光を放ち、その光が髪の毛よりも細かい光の織糸に移り変わっていく。

「っ!! エリエ逃げて!」

光の糸がらせん状の複雑な模様を描き、同心円状に広がっていく。その光が広がっていく方向には、何が起こっているか理解できていないエリエの姿。

「させる……かつ!!」

一瞬早く、シエルティスは持っていた電気槍を投げつけ、ざくつという音とともに、幽幻種を地面に縫い付けた。

……じゅっ……う、……っう……

幽幻種を縫い付けた電気槍が一瞬で融解し、砂のように崩れていく。

その光景にエリエはより顔を蒼白にした。

——魔笛。

幽幻種だけが持つ特異の力を意味する言葉。それは腐敗、猛毒、昏睡、精神破壊。浮遊大陸のあらゆる物質と生物を侵食し、汚染する呪詛の波動。その発動時に呪詛の類を思わせる奇怪な音色を発生させることから『魔笛』の名が付いたと言われている。

「エリエ!今のうちに早く!」

「……………倒した、んじゃないの?」

普通の生物ならほとんど動けない怪我だろう。けれど相手は幽幻種だ。あれくらいでは倒れないことはわかっている。なにせずっと戦ってきた相手だから。誰よりも身にしみてわかっている。

「あれくらいじゃ倒せないんだ、だから早く!」

電気槍で明けた穴も霧で塞がりそこには無傷になった幽幻種が。

■ ■ ■ …… ■ ■ ■ , …… ■ ■ ■ , …… ■ ■ ■
 O e / D i a || U x e p h c l e y , D i s h e l a
 t e o p h e s k a o n

再度毒々しい紫色の煙が光となり、それは細い光の線となり、線状の光が群れをなすように結び、地面に巨大な円を描く。

その光の領域に。足元に浮かぶ光を眺め、ぽかんと立ち尽くすユトの姿。間に合えっ!

自らその光の円の中に飛び込んで、ユトを抱き掛かる。しかし、ユトを抱えたままこの円から出るには時間が足りない。そう判断した僕は――

「エリエ、ユトをお願い!」

背中に気絶した少女を抱えたエリエにユトを放り投げる。

弧を描いて空を渡るユト。その体が光の円を飛び越え、エリエは片手でユトを受け止める。

もしかしてエリエって意外と力持ち？ などと関係ないことを考えてしまう。

「シエルティス、あんたも早く——！」

エリエの言葉に答えたのは地面が煮え立つような耳障りの音だった。

ぽこん、ぽこん。溶岩が泡立つような音と共に、草が、地面が、木がすべてが溶けていく。生物、非生物問わず、幽幻種の魔笛は浮遊大陸オレイエックレテのあらゆる物質を壊死させる。どんな人間でもそれを浴びれば——

ユトを放り投げた僕には逃げる場はなかった。

濃紫色の光が全身を包み込む。

「……………シエルティスつつつ!!」

エリエの顔から血の気が引いた。

魔笛を浴びたらどうなるかわかっていたから。

呆然と立ち尽くすエリエとエリエの服の端をぎゅつと掴むユト。その二人に向かつて幽幻種は歩を進める。

霧状の体から、血管らしきものが蠢く黒色の爪が伸びて——

「三人に手は出させない」

少女に触れる寸前に、その爪を掴んで止める。

「……………シエルティス？」

信じられないものを見た。そんな気持ちが伝わってきたような震える声。草も地面も、土もすべてを腐らせる魔笛を浴びた僕がたっていたのを見たら仕方がないと思う。

だって僕は魔笛が効かないのだから。

効かないというより、僕は魔笛を持っている。だから。

掴んだ爪をはなさず、空いた手で一度、二度、三度と幽幻種の核晶を殴りつける。

普通なら触れたものすべてが腐るのだからこんな真似はできない。できるのは同じ魔笛をもっている幽幻種と僕だけ。

最初はヒビが入りその身にまとう霧の半分が霧散、二度目でヒビが広がりほとんどの霧が霧散。三度目で核晶が砕け、あたりに硬い鉱石が砕けたような音が響く。

幽幻種の本体は、その霧状の体の中心にある紫水晶に似た核晶だ。大きさは個体によつて異なるけれど。おおよそは拳程度。これを砕くことによつて幽幻種を倒すことができる。

それが砕けた今、幽幻種は動きを止めて、蒸発するように煙となつて霧散していく。

「シエルティス、平気なのっ！」

「ああ、うん。大丈夫だよ。すこし爪とかかすっちゃったけれど、ただのかすり傷——」

「そうじゃなくて!」

ああ、エリエは魔笛のことを言っているのか。確かにエリエ達には僕のこと話してなかったからなあ。

「えつとね、エリエ。僕は幽幻種の魔笛は聞かない体質だから大丈夫」

本当とは少し違うけれど、本当のことは言えない。幽幻種は人の敵で、魔笛は幽幻種の武器みたいなものだから。

それを聞いたエリエは、嘘でしょ……、体質って、そんなの聞いたことない。天結宮ソフィアの……とか言っているけれど、納得してもらえない。

「とにかく平気なことだから、安心してよ」

「…………でも」

「三人が無事でよかったよ。それにこの子を助けようとして助けられなかったとかにならなくてよかった。さっ早く応急手当だけにここから離れよう」

よかった。居住区で出会った数少ない友人を助けることができたんだから。

——
ねえユミイ。もう、君のそばに戻ることはかなわない夢かもしれないけれど。

——
天結宮ソフィアの君にせめて心配は書けないように、僕なりにうまくやってるよ。

4話 名前

暖かい、そんな感じがしてふと意識がもどる。

目を開けてまず目に入ってきたものはなんの汚れもない真っ白な天井。そして感触からしてベッドに寝かされている自分。上体を起こし、あたりを見渡す。

部屋は言いようのないくらい広かった。VIPルーム並かそれ以上。しかし、部屋内にはさつきまで自分が寝かされていた高級感漂うベッド、これまた高級感漂う黒いソファーにその前に置かれたテーブルの3つしか置かれていなかった。

「……………うん？」

あれ、ソファアのところにも人影があつたような……。そう思い再度視線を向けるとそこにはソファアに足を組んで座っている人がいた。

体のラインがはつきりわかるほど密着した法衣を纏い、その法衣を内側から押し上げるように主張している魅惑的な身体を持ち、艶のある黒く長い髪がとても印象的だった。

「……………気がついたか」

単調な言葉だけど、その中にどこか温もりを感じる。

「は、はい。あの……それでここはどこであなたは誰でしょうか？」

目の前にいる女性が助けてくれたのはほぼ間違いないだろう。けれど、確か僕は幽幻種に追われて、痛みに耐えながら走り抜いて……、それで茂みを抜けたら目の前に人が見えて安心して気を失っちゃったんだ。

でもあの時見た人達の中には目の前の人はいなかったような……。

「ああ、私の名はツァリ、とある事情でお前の事情を知っている者で、ここは天結宮ソフィアの病棟の特室だから安心するといい、ここでの会話は絶対に外に漏れることはない」

「っー」

僕の事情を知っている……？ それにここは天結宮ソフィアの病棟、それも特室という名前からしてランクの高い部屋と予想できる。そんな部屋は滅多に使うことはないだろうし、使える人間も限られるはず、少なくとも護士候補生とか巫女見習い程度では無理だろう。

「どういう事……ですか……？」

『それは私から説明しましょう。私の名前は紗砂・エンデンス・凜・ケールといいます。周りからはサラと呼ばれています』

突然頭に直接響くように聞こえる幼い女性の声。その声は自らを……つてえええ？

「あ、あなたが私のオリジナルですか?」

「ということは、天結宮ソフイアのトップの皇姫様に関わりを持つている目の前の人は天結宮ソフイアの上層の人?」

『は、はい。そうです。私も最初ツアリから聞いたときは驚きました。私と同じ姿をした子が血だらけで現れて気を失ったと……』

「最初は紗砂が仕事放り投げて遊んでいたのかと思っただが、紗砂なら幽幻種一匹や浮遊大陸オービエ・クレアの生物に襲われても無傷なはずだからな」

『あなたにはあなた自身の名前はありますか? クローンとしての名前ではなく、あなた自身の』

「僕自身の名前……僕の前世の名前だけ思い出せない。それ以外の前世のことは思い出せるのに。」

「となると研究所での……はクローンとしての名前だね。被検体13号とか名前じゃないもんね。」

「って僕今、自身の名前ひとつもないっ?!

「すいません……、私には研究所で呼ばれていた被検体13号くらいしかありません」

「呼ばれていたって言っても実際はその時はまだ僕の意識はなくて、そのことに気がついたのは脱出する前に準備していたときだった。」

『そうですか……。ではリリイ・エンデンス・凜・ケールというのはどうでしょうか？』
「え、いいんですか??」

一応聞き返したものの、僕の……。いやもう僕じゃなくて私かな？ 私の心の中では

その名前を受け入れていて、名前が、自分自身だけのものももらえてとても嬉しかった。

『はい、あなたが気に入っていただけなのなら是非』

「えつとじゃあ、改めて、私の名前はリリイ・エンデンス・凜・ケールです」

私は二人にそう自己紹介した。

5話 巫女様とご対面

天結宮^{ソフィア}268階にあるとある会議室に、現在第三位の巫女とその千年獅、第一位の巫女と千年獅以外の全巫女と千年獅が集まっている中に私はいた。

『では、リリイお願いします』

「はい、ええと、リリイ・エンデンス・凜・ケールです。今日から巫女の六位になりました。よろしくお願いします」

自己紹介が終わったので一礼して椅子に座る。

私は、結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の5系統全てに適正がなく、さらに巫女見習いにもなってもいけないし、個人的に練習したわけでもない。なのに、私は巫女の第六位につくことになった。

それには当然理由があるのだけれど、まだ理由入っていないので、必ず誰かが言うはずだ。

「サラ様、ちょっといいですか？ どうしてこんな急に六人目が決まったのでしょうか？ 本来ならば、規定日時に最終試験で合格した者のみになれるはずですが、今回は最終試験は行われていない」

椅子から立ち上がり、念話で参加している紗砂―紗砂とツアリさんだけの時は呼び捨てで呼んで欲しいと言っていた―に質問する見目麗しい長身の女性。背中を超えて伸びるエメラルド色の長髪は絹糸のようにさらりと流れ、こっちを見ているというか睨んでいる灰色の双眸。

服装からして巫女だと思う。

これに答えるのは紗砂。

元々そういつた質問が来るのは分かっており、紗砂が私が答えたほうが説得力ありますからと言ったからだ。

『確かにメイメルの言うように、巫女は最終試験で決めるのが普通です。しかし、今回の第六位とは言っていますが、リリイは巫女見習いですらないので術式も知らなければ過酷な訓練も受けていません』

「だったらなんでなおさら……」

紗砂が一旦息をついた時にメイメルさんが呟く。

とても小さな声だったけれど、今みんな紗砂の言葉を待っている状況で、この部屋内は静寂が支配している。そのせいでとても良く響いた。

『彼女は沁力だけなら私以上に持っています。そして彼女は大切な鍵^キ。ですがそれだけで六人目の巫女というのに納得できなのもわかります。ですがこれは名前だけの第六

位。納得できないかもしれませんが今はそれで納得してください。時期が来たら全てを話します』

言い終わると同時に念話が切れる感じがした。

「はあ……、納得できないわ、けれどサラ様が言うんだもの。それほど大きな手札ということかしらね」

念話が切れると同時にため息をし、呟くメイメルさん。

会議室内は未だに沈黙が支配していてこの声も良く聞こえた。

「それじゃあ、気を取り直して今度は私たちが自己紹介しましょうか。私は巫女第二位のメイメル・イン・カーネイション。結界系が得意よ。そして隣にいるこの子が爛」

爛と呼ばれた亜麻色の髪を乱雑に切った少女。鮮やかな琥珀色の瞳も印象的だが、それよりも全身に彫られた刺青のようなものが一番印象的だった。

「俺は爛、メイメルの千年獅で第二位、それとこの全身に彫っているのは刻印儀礼で刺青じゃないからな！」

返事をして先の考えを思い出す。

あれ刺青じゃなかったんだ……。確かによく見たら魔法陣みたいなファンタジーみたいな感じがするし、というか視線でバレてたのかな……。。

気がつくともメイメルさんと爛さんは座っていて、銀髪的青年とその青年の服の端を掴

んで後ろに隠れるようにして立っている黒髪の幼い少女。少女の纏う法衣は赤と白の織物で胸元に紫の帯をいう珍しいものだった。

「俺はレオン、今俺にぴったりくつついているのが巫女第四位の春蕾の千年獅だ。俺はあなたにどんな事情があるのかは知らないが、困ったらいつでも俺のところに来るといい。俺に出来ることならできる限り手伝おう」

「……………春蕾……………第四位……………よろ……………しく……………」

こちらこそと返しながら座ったまま頭を下げる。

レオンさんって滅茶苦茶いい人かもしれない！

それにしても、なんかこの二人とても対象的でいい組み合わせだと思う。

そして最後は、淡い^{オフ}黄金色^{ゴールド}の長髪と色鮮やかな翡翠色の瞳、可愛いと綺麗の中間で、とても優しそうなオーラみたいなのを感じる。

その少女は一人椅子から立ち上がり、自己紹介を始めた。

「ユミイ・エル・スフレニクトールです。序列は第五位で得意な術式は洗礼系です。みんなからはユミイと呼ばれてるので気軽にユミイって呼んでください」

そう言つて大きく頭を下げてお辞儀して椅子に座るユミイさん。

あれ……………。

「あの、ユミイさん。ユミイさんの千年獅の方って任務かなにかですか？」

そう、ユミイさんには他の二人の巫女とは違って隣に千年獅の人がいなかった。

もしかしたら任務かもしれないと思って一応聞いてみたけれど、一応六人目の巫女の発表だから多分集まれるような日を選んでとは思うんだけど……。

「え、えっと、私には千年獅はいないんです。それとさん付けなんてしなくても呼び捨てでいいですよ。今日から同じ巫女仲間じゃないですか」

ユミイさ……ユミイが千年獅のことを言っているとき、なぜか悲しみ、寂しさ、そういうものを押し殺して話しているような感じがした。

6話 始まりのとき

浮遊大陸オービエ・クレアのどこかで、ツアリは虚空に向かつて呟く。

「ここに来て新たな可能性、予想外の鍵イレギュラーか……。不確かだ不安定の鍵、しかし、沁力は今もなお伸びている」

そう、段々と大きな手札になっていくだろう。だが、その可能性を選ぶというのなら、予想外の鍵リイは最悪死ぬ。

リイが沁力量だけでなく、技術の方も伸びていけばどうにかなるかもしれない。

「なあ、紗砂、お前はどんな理由で許可を出したのだろうか。罪滅ぼし？ 計画の可能性を上げるため？ それとも純粋に……」

いや、おそらく全てだろうな。皇姫としての理由、紗砂個人として。

だからこそ、リイが巫女であることを隠して、護士候補生になることに条件をつけて許可を出した。

保護者を一人つけること。

保護者とは名ばかりで実際は護衛であり、その護衛は護衛できる力を持っていないけれ

ばならない。

天結宮ソファイアにいる人間ならば条件をクリアできる奴もいるだろうが、天結宮ソファイアの人間はだめだ。そんなことをすればすぐに変な噂が広まるだろう。「天結宮ソファイアの錬護士、または正護士を常に連れて歩いているあの護士候補生は何者か」と。

それではダメだろう。

しかし、天結宮ソファイア以外の人間で私の知り合いの中でその条件をクリアできる人間はいないのも事実。

ならば、あれに頼むしかあるまい。

「紗砂、護衛にする者が決まった。クズノハが適任だと私は思う」

先ほどのつぶやきとは違い、誰かに話しかけるような声。

『確かに私もクズノハがいいと思います。連絡は私からしておきます』

私が天結宮ソファイアに来て3日経った。

今日は結界の譲渡の儀式の日、そしてその結界の譲渡が行われた今日から三日間は皇

姫に捧げる星礼祭。

私は、あまり乗り気ではなかったけれど巫女になった。けれど正式な巫女ではなく名誉巫女みたいなもの。

私は一応前世で剣を使っていたことがあるため、どちらかといえば護士候補生になりたかった。

この世界では幽幻種という敵がいる。

幽幻種は危険であり、倒すには力がある。

この身体は沁力は紗砂と同等あるらしいけれど、結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の適正は0。

適正0というのが本当かどうかは知らないけれど、おそらく本当だと思う。もし仮に0でなければあの研究所が捨てられるはずがないと思うから。

沁力が使えなくても、私には剣がある。けれどそれは前世の危険のない場所で教わったもので、この世界では役に立たないかもしれない。けれどある程度知っているのも事実で、ここには強くなるための方法や場所、すべてが揃っている。

なら、私は護士候補生となって強くなりたい。

そう思つて紗砂をお願いした。巫女のことには巫女と千年獅、紗砂、ツアリしか知らない。

これがもし、正式に発表されていたなら私は護士候補生になることはできなかつたと思う。

けれど運良くそれはなく、護士候補生になることを条件付きで許可してもらえた。

その条件は、保護者を連れて行くこと。

それは納得できる条件だった。中身は前世の分があるけれど、見た目は11、12歳位にしか見えない。

護士候補生になる人はほとんどが男性であり、女性はごくわずか。しかも11、12歳の女の子が護士候補生になるのに心配してくれているのかな？　と思っている。

そして朝から星礼祭の準備をしていた時、紗砂から念話が来て291階に来て欲しいと言われて、向かっていたところだ。

天結宮ソフイアの最上階へと続く昇降機エレベーター。

その扉の前にあるセンサーに手をかざす。

、『確認……沁理局との正常連携……照合……沁力波形一致………認証中………巫女の第六位、リリィ・エンデンス・凜・ケールと確認されました』

認証の音声途切れると両開きの扉が開き、私は円形の小さなフロアの中心に移動する。

中心につくと共にこちらの返事を待たずに動き出す昇降機。

目的の階についたことを知らせる鈴の音とともに昇降機が止まり両開きの扉が開く。

両開きの扉の向こうには、蒼く輝く氷の世界が広がっていた。

天結宮ソフイアの大きさは常識はずれだが、それでも一応建物のはず。それなのに、ここ天結宮ソフイアの291階、『楽園』と名付けられた最上階には天井もなければ横壁もない。

どこまでも広がる無限の空間。

遮るもののない頭上には白夜に似た光があふれ、その輝きのしたには鋭く尖った透き通る山がどこまでも連なる景色。

ここに来たのは二度目。

二度目だからこそあらかじめこの寒さに覚悟を決めていられたが、最初の時はやばかった。あまりの寒さに気を失うほど寒いのだ。

ここの寒さは普通の寒さじゃない。

どんなに暖かくしても、あらゆる生物、物質そして幽幻種は全て例外なく凍らせて、その心と時を封印する沁力術式——氷結境界らしい。

関係ないことだけど、沁力で氷を造ることができるなら、沁力で炎や電気、水、風などでもできるような気がする。けれど私にはそれを試すことはできない。なぜなら結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の適性が0なのだから。

この世界での沁力って前世でいう魔力みたいなものだと思う。なら魔法でできる炎や水、風などもできるのではと思ったわけだ。

そんなことを思いながら蒼氷の連なる回廊を進んでいくと、やがて蒼氷の連邦が途切れる。

そこは『楽園』の中心部。

『楽園』の中心には巨大な蒼氷結晶が。

その淡く透き通った結晶の中心には、一人の女性が閉じ込められている。

その女性は皇姫サラ。私のオリジナル。けれどその姿かたちは違う……というよりも、目の前にいる紗砂は私の体が成長した姿らしい。

紗砂はこの結晶のなかで、たったひとりで氷結境界を祈り続け、オービエ・クレア浮遊大陸を守つてきたらしい。

一年のほとんどをこの部屋で費やし、この寒さのあまり激痛がはしる凍てついた結界で、何十日も祈り続けるらしく、30日の内27日間を紗砂が結界を維持して、残りの3日間を巫女達が維持するらしい。

らしいとつく事はすべてツアりに教えてもらったものだ。

『リリイ、おはようございます。ツアリは用事のため来れないとのことなので、早速本題に入りますよ』

「うん、紗砂もおはよう。今日呼んだのって保護者のこと？」

『はい、本来ならばこの場に来てもらって紹介したかったのですが、お願いしたのが急だったためにここに来るのに時間がかかるそうです。なので今日は保護者が決まった報告と、保護者の簡単な特徴を話そうと思いい来てもらいました』

どんな人かは知らないけれど、保護者の人には感謝感謝だね。

あまり乗り気ではなかったけれど巫女になった私。普通は巫女なのに護士候補生になれるわけもない。

けれどなぜか何度もお願ひしたら、条件付きで許可をだしてくれた。

その条件が保護者をつけることで。

私の護士候補生の生活はその保護者の人のおかげ。

うーん、どんな人なんだろうなあ……。

『名前はクズノハといいます。クズノハは氷結境界がなかったずっと昔から一緒に戦ってきた数少ない友人であり、仲間です。彼女は攻めるよりも守る方が得意で補助サポーターもでき、今回の護衛には向いていると思います』

氷結境界がなかったところから一緒に戦ってきた？

それってつまり千年以上生きているってことだよね。

紗砂にしてもツアリにしても、今回の保護者をしてくれるクズノハさんって人も常識

を無視しすぎだと思う。

どうやったら千年も生きてられるんだろう。

やっぱり沁力に何か秘密が……？

『守る方が得意といつても——っ！ 氷結境界が破られたっ？ 浮遊大陸オービエ・クレアに侵入した

幽幻種は数千体……。リリイ、あなたは281階の大聖堂に向かつてください。そこにはユミイをはじめ、メイメル、春菫、爛、レオンがいます。それと剣は持っていますね。もしもの場合はそれで救援が来るまで耐えてください』

剣というのは、私が研究所で見つけた細い剣。

幽幻種から逃げるときも捨てずに強く握っていたらしく、天結宮ソファイアに運ばれるまで握っていたらしい。

この世界に来てまだ一度も剣を振ったことはないし、前とは身体が違う。けれど、それでも無いよりはあったほうがマシ。

私はスカートのポケットに入っている剣の柄を強く握りしめて返事をし、大聖堂へ向けて走り出す。

7話 始まりのとき2

281階の大聖堂に向かっていると、巫女第二位のメイメル（本人から呼び捨てにして欲しいと言われた）の声が直接響く。

それは紗砂が言っていた氷結鏡界が破られたということと、数も紗砂の言ったとおり数千体、そしてもうすぐ浮遊大陸はその数千帯の幽幻種に襲われるという内容だった。

『現状は理解できたわね？』そこで居住区にいるみなさんをお願いよ。今から30分以内に緊急用のシエルターに避難して。天結宮の護士たちが命を張ってそこを守ります。

『いいわね？』

天結宮ソフイアにいる戦闘員の数は護士候補生、巫女見習いを含めて1200人ちよつと。

それに対して幽幻種は数千体。最低でも2000体、多かつたらほぼ5桁並かもしれない。

そうなるも最低でも一人分のノルマは幽幻種2体、最高は10体となる。

しかし、戦闘員のほ半分以上は候補生か見習いであり、候補生や見習いの人が一人二体倒すことすらきついだらう。

そうなる——ほぼ確実に防衛戦は突破される。ならば私も戦うことになる。

戦う事に迷いはない。前世では剣を習っていたし、ある程度の恐怖なら耐えることもできる。さすがに初めて幽幻種を見たときは怖かったし死ぬかとも思った。

けれど、私にはある切り札がある。それはツアリさんから教えてもらったものだけ。人は皆少なからず沁力を持っている。けれど魔笛に侵食されるのはなぜか、というもの。それはたとえ沁力を持っていても一般人が魔笛に襲われたとき、魔笛に侵食される。

それは魔笛が沁力を圧倒していたため、沁力が打ち消されているということ。

魔笛と沁力は正反対に位置されるもの。ならば逆に沁力が魔笛を圧倒していたら、魔笛は打ち消される。

私の沁力は紗砂以上らしい。そしてそれほどの沁力ならば大抵の魔笛は打ち消される。

そのことは私にとって、とても大きな切り札になった。

けれど、それは魔笛が打ち消されるということだけであって、幽幻種の物理的攻撃などは打ち消せないということ。

天結宮^{ソフイア}の281階につき、大聖堂の扉を勢いよく開き中にはいる。

黄金に似た色に輝く祭具、そして星と月を描いた巨大なステンドグラス。ここはいるだけで浄化されそうなほどで、天結宮^{ソフイア}最大の礼拝場。

「リリイ？ 私と爛は居住区に行くわ。ここはレオンに任せてる。あなたはユミイと春蕾と一緒にいなさい！ あなたはあなたができることをしなさい！」

大聖堂に入ったと同時にメイメルに一息で色々言われる。

一息で言い切ったメイメルは爛を連れてすぐに大聖堂から出て行った。

メイメルと爛は居住区に行く、これって確か原作一巻の内容だったはず、私が知っている原作内容はそう多くない、知っているのはこの件が終わって少しあとまで。

原作ではシエルティスが今いる大聖堂に来て統率個体を倒して終わったはず。

けれど、それは私がない世界の話。私がいるというだけで全く同じになることはないし、何よりここは現実の世界だ。シエルティスもユミイを本の中のキャラクターじゃなくて生きている一人の人間。

それはこの世界に来た時からわかっていたこと。私は演じるんじゃないやなくて自分の思ったとおりに行けばいい。

私は誰も死なずに終わらせたい。

そのためには力が必要で、私はそのために護士候補生になろうと思った。

それは今の私の力では誰も死なせないなんてことを言わせることはできないから。けれど今の力でも少し位は幽幻種の数を減らすことができる。

「——リリイ、リリイ！」

私を呼ぶユミイの声が聞こえる。

「えっ？ あ、はい。どうしたんですか？」

「リリイ大丈夫？ さつきからずっと呼んでるのに反応ないから、体調でも優れないのかなあって思ってた」

ああ、私が決意しているときずっと呼ばれていたんですか。

「大丈夫ですよ、私は私にできることをしようと決意してただけですから」

私の決意は少しでも幽幻種の数を減らす、というもの。

「ユミイ、春蕾、私はレオンについていこうと思います。多分ですが、レオンは天結宮^{ソフィア}で護士達を統率しながら幽幻種を食い止めるのでしょ？」

巡回の人と居住区に向かったメイメルと爛でも全ての幽幻種を止めることはできないはず。そうなるここに残った中で天結宮^{ソフィア}の最後の壁になる人はユミイと春蕾とレオン。

ユミイと春蕾は巫女だし、もうすぐ結界の譲渡をしなくちゃいけない。そうなるに残ったレオンがあてはまる。

「駄目だ、戦えない人間はいない方がいい。足でまといだ。それになによりお前は非公式とはいえ巫女だろう？ そんな人間を危ないところに連れて行くわけには行かない」
もし私が戦う力をもっていないければ心が折れていたかも知れないほどグサツときましたよ。

けれどレオンはわざとそうやって私を危険な目に遭わせないようにしているのでしょうか。

「戦えない人間はいないほうがいい。ということは戦える人間ならいてもいいってことですよね？」

私はポケットから柄を取り出し、剣を構築する。

突然の行動にレオン達は驚く。

「少しなら私も戦えます。それに私は術式なんて何も使えないんです。ここにいるよりあなたと一緒にいた方が役に立てると思います」

これでレオンが許可してくれなければ、私にはもう手がない。

それに今私が言ったことは、たった一言ですべてが打ち消される。

「駄目だ、例え戦えたとしてもお前は巫女だ。巫女を戦場に連れて行くなんていう危ない目には合わせられない。ユミイ、春蕾。リリイを頼む」

そうやってレオンは大聖堂から出て行った。